

人生

夏目漱石

青空文庫

空を劃くわくして居る之を物といひ、時に沿うて起る之を事といふ、

事物を離れて心なく、心を離れて事物なし、故に事物の変遷推移を名づけて人生といふ、猶麤なほきんしんぎうびばてい身牛尾馬蹄のものを捉へて麟きりんといふが如し、かく定義を下せば、頗る六つかしけれど、是を平仮名

にて翻訳すれば、先づ地震、雷、火事、爺おやぢの怖きを悟り、砂糖と塩の区別を知り、恋の重荷義理の柵しがらみ杯いふ意味を合点がてんし、順逆の

二境を踏み、禍福の二門をくぐるの謂いひに過ぎず、但其謂たゞに過ぎずと観みずれば、遭逢さうほう百端ひやくたん千差万別、十人に十人の生活あり、

百人に百人の生活あり、千百万人亦各千百万人の生涯まゐのくを有す、故に無事なるものは午砲を聞きて昼飯を食ひ、忙しきものは孔席こうせき

暖かならず、墨突黔せずとも云ひ、変化の多きは塞翁の馬に
しんをかけたるが如く、不平なるは放たれて沢畔に吟じ、壮烈な
るはヒ首を懷にして不測の秦に入り、頑固なるは首陽山の薇に余
命を繋ぎ、世を茶にしたるは竹林に髯を拈り、図太きは南禅寺の
山門に昼寝して王法を懼れず、一々数へ来れば日も亦足らず、中
々錯雑なものなり、加之個人の一行為、各其由る所を異に
し、其及ぼす所を同じうせず、人を殺すは一なれども、毒を盛る
は刃を加ふると等しからず、故意なるは不慮の出来事と云ふを得
ず、時には間接ともなり、或は又直接ともなる、之を分類するだ
に相応の手数のかゝるべし、況して国に言語の相違あり、人に上
下の区別ありて、同一の事物も種々の記号を有して、吾人の面目

を燎爛れうらんせんとするこそ益面ますく倒なれ、比較するだに畏かしこけれど、万乗には之を崩御ほうぎよといひ、匹夫ひつぷには之を「クタバル」といひ、鳥には落ちるといひ、魚には上がるといひて、而も死は即ちすなは一なるが如し、若し人生をとつて銖分しゆぶん縷析するを得ば、天上の星と磯いその真砂まさごの数も容易に計算し得べし

小説は此錯雑なる人生の一側面を写すものなり、一側面猶且なほかつ單純ならず、去れども写して神しんに入るときは、事物の紛糾ふんきう乱雜なるものを綜合して一の哲理を数ふるに足る、われ「エリオット」の小説を読んで天性の悪人なき事を知りぬ、又罪を犯すものの怨ゆるすべくして且憐あはれむべきを知りぬ、一挙手一投足わが運命に關係あるを知りぬ、「サツカレー」の小説を読んで正直なるものの馬鹿

らしきを知りぬ、
狡かうくわつ 猾わつ 奸かん 佞ねいなるものの世に珍重せらるべき

を知りぬ、「ブロンテ」の小説を読んで人に感応あることを知りぬ、蓋しけだ小説に境遇を叙するものあり、品性を写すものあり、心

理上の解剖を試むるものあり、直覺的に人世を觀破するものあり、

四者各其方面に向つて吾人に教ふる所なきにあらず、然れども人

生は心理的解剖を以て終結するものにあらず、又直覺を以て觀破

し了おほすべきにあらず、われは人生に於て是等これら以外に一種不可思議

のものあるべきを信ず、所謂いはゆる不可思議とは「カツスル、オフ、

オトラントー」の中の出来事にあらず、「タムオーシヤンター」

を追懸おひかけたる妖怪にあらず、「マクベス」の眼前に見はるあら、幽霊

にあらず、「ホーソーン」の文「コルリツヂ」の詩中に入るべき

人物の謂いひにあらず、われ手を振り目を揺うごかして、而も其の何の故に手を振り目を揺かすかを知らず、因果の大法ないがしろを蔑にし、自己の意思を離れ、卒然として起り、驀ばくち地に來るものを謂いふ、世俗之を名づけて狂氣と呼ぶ、狂氣と呼ぶ固もとより不可なし、去れども此種の所為を目して狂氣となす者共は、他人に対してかゝる不敬の称号を呈するに先さきつて、己等亦曾おのれらかつて狂氣せる事あるを自認せざるべからず、又何時いつにても狂氣し得る資格を有する動物なる事を承知せざるべからず、人豈あに自ら知らざらんやとは支那の豪傑の語なり、人々自ら知らば固もとより文句はなきなり、人を指して馬鹿といふ、是れ己が利口なるの時に於て発するの批評なり、己も亦何時にても馬鹿の仲間入りをするに充分なる可能能力を具備するに氣が

付かぬものの批評なり、局に当る者は迷ひ、傍観するものは嗤ふ、
而も傍観者必ずしも碁を能くせざるを如何せん、自ら知るの明あ
るもの寡なしとは世間にて云ふ事なり、われは人間に自知の明な
き事を断言せんとす、之を「ポー」に聞く、曰く、功名眼前にあ
り、人々何ぞ直ちに自己の胸臆を叙して思ひのまゝを言はざる、
去れど人ありて思の儘を書かんとして筆を執れば、筆忽ち秃し、
紙を展ぶれば紙忽ち縮む、芳声嘉誉の手に唾して得らるべきを
知りながら、何人も踟躇して果たさざるは是が為なりと、
人豈自ら知らざらんや、「ポー」の言を反覆熟読せば、思半ばに
過ぎん、蓋し人は夢を見るものなり、思ひも寄らぬ夢を見るもの
なり、覚めて後冷汗背に洽く、茫然自失する事あるものなり、夢

ならばと一笑に附し去るものは、一を知つて二を知らぬものなり、
 夢は必ずしも夜中臥床の上にもみ見舞に来るものにあらず、青天
 にも白日にも来り、大道の真中にも来り、衣冠束帶の折だに容
 赦なく闖たつを排して闖ちん入にふし来る、機微の際忽こつぜん然として吾人を愧き
 死しせしめて、其来る所固もとより知り得べからず、其去る所亦尋ね難
 し、而も人生の真相は半ば此夢中にあつて隱約たるものなり、此
 自己の真相を發揮するは即ち名譽を得るの捷せ徑けいにして、此捷徑
 に従ふは卑怯ひけふなる人類にとりて無上の難関なり、願はくば人豈あに自
 ら知らざらんや扨などいふものをして、誠実に其心の歴史を書かしめ
 ん、彼必ず自ら知らざるに驚かん

三陸の海嘯濃尾の地震之を称して天災といふ、天災とは人意の
つなみのうづ

如何^{いかん}ともすべからざるもの、人間の行為は良心の制裁を受け、意
 思の主宰に従ふ、一挙一動皆責任あり、固^{もと}より洪水飢饉^{こうずゐききん}と日を
 同じうして論ずべきにあらねど、良心は不斷の主権者^{がぜん}にあらず、
 四肢^{しし}必ずしも吾意思の欲する所に従はず、一朝の変俄然^{がぜん}として己
 靈の光輝を失して、奈落^{ならく}に陥落し、闇中に跳躍する事なきにあら
 ず、是^{このとき}時^{あた}に方つて、わが身心には秩序なく、系統なく、思慮な
 く、分別なく、只一氣の盲動するに任ずるのみ、若し海嘯地震を
 以て人意にあらずとせば、此盲動的動作亦必ず人意にあらじ、人
 を殺すものは死すとは天下の定^{ぢやうはふ}法^{はふ}なり、されども自ら死を決
 して人を殺すものは寡^{すく}なし、呼息^{せま}逼り白刃^{はくじん}閃^{ひらめ}く此刹那^{せつな}、既に身
 あるを知らず、焉^{いづく}ぞ敵あるを知らんや、電光影裡^{えいり}に春風を斫^きる

ものは、人意か將^はた天意か

青門老圃^{らうぼと}独り一室の中に坐し、冥思遐搜^{めいしかさう}す、両頬^{せき}赤を発し火の如く、喉間^{こうかん}略々^{かくく}声あるに至る、稿を属^{しよく}し日を積まざれば出でず、思を構ふるの時に方^{あた}つて大苦あるものの如し、既に来れば則ち大喜、衣を牽^ひき、床を遶^{めぐ}りて狂呼す、「バーンス」詩を作りて河上に徘徊^{はいくわい}す、或は呻吟^{しんぎん}し、或は低唱す、忽ちにして大声放歌歔歔^{ききよ}涙下る、西人此種の所作をなづけて、「インスピレーション」といふ、「インスピレーション」とは人意か將^はた天意か「デクインシー」曰く、世には人心の如何^{いか}に善にして、又如何に悪なるかを知らで過ぐるものありと、他人の身の上ならば無論の事なり、われは「デクインシー」に反問せん、君は君自身がど

の位の善人にして、又どの位の悪人たるを承知なるかと、豈あいたゞ善

悪のみならん、怯けふゆう勇剛弱高下の分、皆此反問中に入るを得べし、

平かなるときは天落ち地欠くとも驚かじと思へども、一旦事あ

れば鼠糞そふんりやうじやう梁上より墜おちてだに消魂の種となる、自ら口惜しと

思へど詮せんなし、源氏征討の宣旨せんじかうむを蒙りて、遙々はる／＼富士川迄押し

寄せたる七万余騎の大軍が、水鳥の羽音に一矢いつしも射らで逃げ帰る

とは、平家物語を読むものの馬鹿々々しと思ふ処たゞならん、啻ただに後

代の吾々が馬鹿々々しと思ふのみにあらず、当人たる平家の侍さむらひ

共ひどもも翌日は定めて口惜しと思ひつらん、去れども彼等は富士川

に宿したる晩に限りて、急に揃ひも揃うて臆病風にかゝりたるな

り、此臆病風は二十三日の半夜忽然吹き来りて、七万余騎の陣中

を馳^かけ廻^{めぐ}り、翌くる二十四日の暁天に至りて寂^{せき}として息^やみぬ、誰か此風の行衛^{ゆくゑ}を知る者ぞ

犬に吠^ほえ付かれて、果^はてな己は泥棒かしらん、と結論するものは余程の馬鹿者か、非常な狼狽^{あわてもの}者と勘定するを得べし、去れども世間には賢者を以て自ら居り、智者を以て人より目せらるゝもの、亦此病にかかることあり、大丈夫と威張るものの最後の場に臆^{ひけふ}したる、卑怯^{ひけふ}の名を博したるものが、急に猛烈の勢を示せる、皆是れ自ら解釈せんと欲して能はざるの現象なり、況^{いはん}や他人をや、二点を求め得て之を通過する直線^{きかがく}の方向を知るとは幾何^{きかがく}学上の事、吾人^{ごじん}の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方向を定むるに足らず、人生は一個の理窟^{まど}に纏^{まと}め得るものに

あらずして、小説は一個の理窟を暗示するに過ぎざる以上は、

「サイン」「コサイン」を使用して三角形の高さを測ると一般なり、吾人の心中には底なき三角形あり、二辺並行せる三角形あるを奈何せん、若し人生が数学的に説明し得るならば、若し与へられたる材料よりXなる人生が発見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は余程便利にして、人間は余程えらきものなり、不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る、海嘯と震災は、啻に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、險呑な
る哉

（明治二十九年十月、第五高等学校『竜南会雑誌』）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系」 夏目漱石集（一） 筑摩書房
1968（昭和43）年10月25日

入力：柿澤早苗

校正：伊藤時也

2000年2月4日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

人生

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>